

### 36. キチジ *Sebastolobus macrochir* (Günther)

図版15

英名 kichiji rockfish, bighand thornyhead, broadhand thorny-head

露名 ドリノピエユイ モルスコイ ヨルシ  
Длиннопёрый морской ёрш

地方名(北海道) キンキン、キンキ、メンメ、メイメイセン、メメセン

漢字 喜知次、吉次

アイヌ語名 フレソイ

【形態】 体は長卵形で側扁\*する。頭部の各種の棘\*は強く鋭い。眼は大きく、眼径\*は吻\*よりも長い。口は大きく、上あごの後端は眼の中央下に達する。上あごの前縁は、両眼間隔方向にほとんどまっすぐかややくぼむ。胸びれの後縁に切れ込みがあり、下半分の5~6本の軟条\*は肥厚する。背びれの棘条\*部に大きい黒色斑\*があるのが特徴である。体長\*は30cm以上に達する。

キチジ属\*には本種\*以外にアラスカキチジ *Sebastolobus alascanus* およびヒレナガキチジ *S. altivelis* が知られる。

アラスカキチジは背びれ棘条部の黒斑が薄く不明瞭\*であることでキチジと区別されるが、日本近海ではまれである。アラスカキチジは体長80cmにも達する。ヒレナガキチジは日本近海ではとれていない。キチジ類の胸びれに

は、メヌケ類と異なり切れ込みがある。またメヌケ類は卵胎生\*、キチジは卵生\*であることでも異なる。

**【生態】** 駿河湾以北の本州、北海道および千島の太平洋側、オホーツク南西部に分布し、日本海にはいない。ベーリング海や西カムチャツカ水域にも分布する。水深150~1,200 mの大陸棚\*斜面に生息し、小型魚は浅い所に、大型魚は深い所に多い。特に小型のものは、堆\*や海丘\*など特定的水域に多く集まる傾向がある。

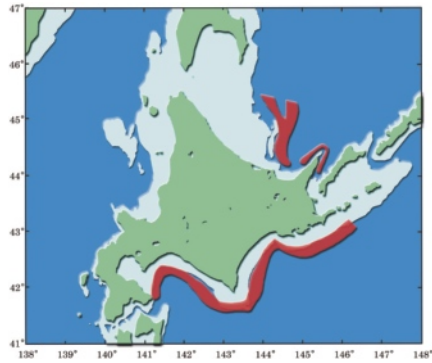
オホーツク海の北見大和堆\*の群は、多くは北側のロシア水域から南下してくると考えられている。この群は年を経るごとに知床岬周辺へ移動し、なかには太平洋側の北海道歯舞から青森県三沢沖にまで移動するものもある。一方、7年経過しても北見大和堆に残るものもある。

このように短期的には大きな移動をせず、冬に深み、夏に浅みへと動く程度で、岩礁域に定住する傾向が強い。しかし数年という単位で長期的にみると、北から南へと一方通行的に大きく移動する。

性成熟\*する体長は海域によって異なり北ほど大きい。三陸北部から北海道では、雌



標識放流\*再捕\*水域と推定移動経路

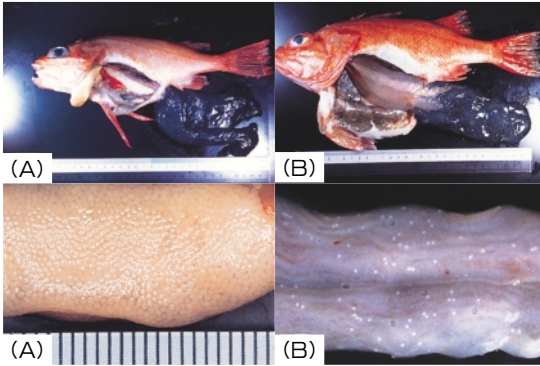


北海道におけるキチジの漁場

キチジ

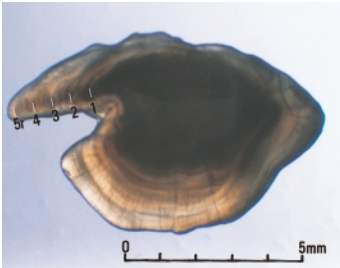


産み出された卵塊 (浅虫水族館提供)



産卵魚 (A:産卵1回目 B:産卵2回目)  
上:開腹状態 下:卵巣内卵巣

は体長15cm、雄は体長17cmから、常磐海域では、雌は体長13cm、雄は体長12cmから成熟\*し始める。産卵期は北海道周辺で2～5月。卵はやや楕円形で長径1.2～1.3mm、短径1.1～1.2mmである。卵はゼラチン質に包まれ、長さ35cm、幅6.5cmの長楕円形の卵塊\*となり浮遊する。卵塊は中空でゼラチン質中に



キチジの耳石(数字は不透明帯数を示す)

卵が1層に散らばる。産み出された後、ゼラチン部分は徐々に溶解して薄い膜状となり、約2週間後には消失し、卵は1粒ずつ分離する。天然の卵塊は湧昇\*流によって海面近くに運ばれたものが見つかっているが、報告は数例である。仔稚魚\*は日本近海では見つかっていない。

産卵場は太平洋ではえりも岬東側から、恵山岬沖、八戸・宮古沖、金華山沖、常磐沖に

かけての水深500mに沿って連続してであると推定されている。オホーツク海では、完熟卵\*を持ったキチジが確認されているが極めて少なく、産卵場を特定するに至っていない。卵は1産卵期に2回に分けて半数ずつ産み出され、1回の産卵数\*は3万粒前後である。産卵直前の個体のうち、1回目のものはすでに次の産卵のための卵が用意されているが、2回目のもものでは残留卵が認められるだけである。ただ、このような完熟卵巣を持ったものは、産卵期であっても漁獲されることは極めて少ない。一方、雄の漁獲物の大部分は精子を持った成魚\*で、一部には体腔\*内に精液が充満しているものもほぼ周年みられる。

水温12～18℃で受精後9日前後でふ化する。ふ化直後の仔魚\*は全長\*2.9～3.2mm。ふ化後4日目で全長3.5mm前後、卵黄が小さくなり、胸びれができる。13日目で卵黄が完全に吸収され、体長3.8mmとなる。その後、海底で生活するようになる。

年齢は耳石\*の不透明帯\*の数で分かる。また体長組成や、その年変化から

も年齢と体長の関係が推定される。満1歳で体長8～9cm、2歳で12cm前後、3歳で15cm前後、4歳で18cm前後となり、その後は1年に1～2cmずつ成長して、最大30cm以上になる。

餌は成長に伴って変わる。体長15cmまではオキアミ類\*を多くとり、15～20cmになるとエビ類を食うようになる。20cm以上のものは主にエビ類と魚類を食う。大型魚ほど底生性の餌を多くとる。摂餌<sup>せつじ</sup>している魚の割合や摂餌量は、午後5時ごろ、次いで午前2時ごろに多い。